

『地域振興のためのパートナーシップ』

アンドレ・トール, ドミニック・ヴォレ共編著

国際領域 上席主任研究官 須田 文明



『Partenariats pour le développement territorial』

著者／André Torre, Dominique Vollet
出版年／2016年
発行所／QUAE

農村振興にかかる問題については、先進各国は同様の現象を共有しているように思われます。西欧各国では、70～80年代から農村への人口移動が指摘されていますが、フランスの近年の研究によると、こうした農村への人口流入は、若年層によるものであり、彼らは、都市に就業先を持ちながら、都市部では住居を持たず、住居費用の安価な周辺農村部に居住し、毎朝、都市部へと自動車通勤することになります。農村部への人口流入は、必ずしも田園生活を享受しようというロマンチックな動機だけに基づくのではなく、こうした現象は多くの論者によって、「隔離ségrégation」という表現で、批判的に指摘されるようになりました。もちろん、こうした人口増を当て込んで、農地の都市化を待つ人たちもおり（「宝くじに当たる」という表現がよく使われます）、その多くは元農業者の子息です。小規模面積の農地を所有し、その農作業はすべて農作業請負会社に委託しているので、「幽霊経営者」と皮肉を込めて呼ばれます。こうした農村の都市化の問題、優良農地の浸食の問題が、フランスでの近年の政策課題の重要な一つをなしています。

このような状況もある農村をどのように振興していくのか、本書は、具体的な事例に基づいた研究成果の集成です。その手法もエンジニア科学、農学、社会科学などの学際的な手法に基づいており、「研究＝教育・訓練＝行動」というアプローチを基本としています。

さて、本書の構成ですが、第一部は地域振興に資する研究アプローチの提示がなされます。1章は「アクター＝研究者のパートナーシップの支援」、2章は「研究＝教育・訓練＝行動」、研究者の調査・分析と現場アクターの知識・能力の向上、そして実際への課題の取り組みを、並行して、有機的に連携しつつ進めていくものです。3章は「Thau地方における地域エンジニアリング」、4章は「地域ガバナンス実施のためのガイドブックの構築」、5章は「共有された地域診断手法」に当てられています。いずれも地域での経験を踏まえ、かなり理論的にまとめられ、ガイドブックや診断手法のように、ここで採用されているアプローチは、別のコンテキスト

にも容易に移転可能なように叙述されています。

第二部は、部門的争点に向けられた手法と題され、農業や森林部門について、より実践的な勧告がなされています。6章は「ブルゴーニュの持続的農業のための蛋白作物部門の潜在力」、7章は、「乳業者に適用された早期シグナル戦略システム®3SP」であり、酪農家の意思決定支援ツールを紹介しています。8章は「森林政策と土地利用計画の分析手法」で、1999年と2009年のハリケーンに見舞われた森林地帯で、都市化圧力のある地方（ランドの県）を事例に、地域振興と森林部門をよりよく管理するための手法が紹介されています。9章は「資源アプローチ」と題して、VercorsのブルーチーズとArdècheの栗という二つの地理的表示産品（欧州のPDO登録）を事例に、差別化・種別化の戦略として、可能な限りのアクターを動員して地域の特有の魅力の発掘・顕在化・強化を図るための資源アプローチの手法を論じています。

第三部は地域的争点全体への対応に資する動員可能な戦略的手法を取り上げています。10章は「Grand Clement地区における地域整合性スキームSCOTの参加型手法」について扱っています。2000年に制定されたSCOTは土地利用計画化の主軸と考えられており、その主たるイノベティブな特徴は、都市計画の作成から修正、フォローアップまでを担う公的機関（この場合、市町村ではなく広域行政圏）がすべての計画・実施・関係者の結節点となることです。11章は「ライフサイクル分析による地域メタン化プロジェクトの環境評価」、12章は「飲料水取水地帯におけるシナリオ共同構築」、13章は「地域アニメーションによる景観の公共政策の実施をいかに支援するか」です。

本書の各章の題目を見ても、フランスが、我が国と多くの共通問題に直面していることがうかがえます。また、研究者と地域振興アクターとが協力して課題に取り組んでいる姿が見えてくることと思います。